

「ボランティアに参加して」

3年A組 S.O. (川口市立青木中学校出身出身)

テレビで被災地を見ていて、大きな被災を受け、たくさんの人が困難にあっていたのを十分理解しているつもりでした。しかし、自分の目で現地の状況を実際に見て、震災を経験した方々のお話を聞いて、想像を超えるような大変な被害にあった場所、苦しい思いをしてきた人たちの気持ちを、新しい気持ちで深く考えることができたと思います。そこから、改めて自分が今まで考えていた気持ちのゆるさ、無力さを感じガッカリしました。津波がこの高さまで来て、人をのみこんでしまうことをなんども想像して、そのせいで亡くなってしまった人、こわい思いをした人、家族、家をなくしてしまった人たちのことを考えたとき、自分が今あたりまえのように家族と暮らし、自分がこの場に立ち生きていることさえもすごくありがたく思うし、その方々の気持ちを胸に、強く生きていかなければいけないなと感じました。のりの箱づめのお手伝いやわかめの作業の時、自分ができることはこれしかないのかとちっぽけに感じたけど、そこにいた人たちは、「ありがとう、助かったよ。」と私たちに感謝してくれたり、現地で会う人、会う人、毎回すごくいい人たちばかりで、すごく温かい気持ちで胸がいっぱいになりました。自分たちにできることがどんなに小さなことだとしても、その力をつみ重ねていけば大きなものになるのかなと思ったので、帰ってもできることは積極的に取り組んで、今回してくださった事に恩返しできるように、協力していきたいと深く考えました。まだまだ、石巻・東松島は、全ての人から見て完全に復興したといえる状況に五年たった今もないことをとても悲しく思いました。私が今回のボランティアで「感じ、考え、見て、学んだ事」をたくさんの人に話して、このことを知ってもらい、多くの人と協力して、復興に近づけていけるようにできるように、努力していきます。



3年A組 C.S. (蓮田市立蓮田南中学校出身)

私は、東日本大震災があったとき、まだ小学校6年生で、それから5年たち、今回石巻・東松島に来ることは初めてでした。今までテレビの画面上でしか見たことのなかった場所に実際にきて多くのことを感じ考えました。正直、現地の状況は自分が思っていた以上で、言葉を失うこともありました。それでも現地の、家も流れてしまい、家族を亡くした人たちが、あの日のことを私たちに教えてくださったことはとても貴重だし、どれだけ震災の影響が大きく悲惨なものであったのか語ってくれました。私が震災後過ごしてきた5年間と震災の影響を受けた方々の5年間は同じものではないし、時間が経つにつれ、だんだんと薄れてきてしまっているあの日のことは、本当に絶対忘れてはいけないことだと思いました。





かんぽの宿という施設を訪れたとき、その場所は大川小学校とは違い、がれきが未だに残っていました。かんぽの宿をみていたときに5年前の3月11日から時間が止まっているように感じました。地面に散乱したお皿や靴、車のバンパーまで多くのものが落ちていました。それに津波によって割られたガラス、曲がりくねったドアや破壊された檻。本当に目を疑うもので、信じられなかったです。津波、地震の怖さを目の当たりにしました。現地の人のお話を聞き、交流していく中で、

地域の皆さんが自分たちを迎えてくれて、本当に優しく温かい人たちで、「これでだいじょうぶかな」と少し不安な気持ちでボランティアにきているのに、こんなにも皆さんが優しくてうれしかったし、感動してしまいました。今回のボランティアで、どれ程自分が地域に貢献することができたかわからないけど、笑顔で私の話を聞いてくださったり、迎えてくださったりしていただいて、また来よう、また来たいと思ったし、まだまだこれから始まった復興が、少しでも早く進むように、自分にできることをやっていきたいと思いました。

3年A組 K. T. (志木市立志木中学校出身)

ボランティアに参加してまず感じたことは人の優しさです。被災地の人達は自分よりも比べられない程つらい思いをしたにもかかわらず、温厚な態度で私たちに接してくれたことに感謝しきれないほど感謝しています。特にボランティアをして雇われている側の人間だったのに、食べ物をくれたり積極的に会話を振ってくれたり気遣いしてくれて、むしろ申し訳のない気持ちになりました。そんな人達も家族や家を失っていて、最初は軽率なことは言えなかったが、それでも被災地の人達が、自分達の話聞いて笑ってくれたりして嬉しかったです。中でも印象に残っていたことは、手のほどこされていない倒壊したスポーツセンターです。外装自体は状態をとどめているものの、中は筆舌に尽くしがたいものでした。建物にどうい物が置いてあって、何のために使われていたのか見当もつきませんでした。自然の脅威を肌で感じました。人の手ではびくともしないような柱が容易に曲がっているのを見て、自然に恐怖しました。あの日、テレビのニュースで見た惨劇は映画のようで、日本であのようなことが起きていたと思うととても信じられませんでした。車はあんなにも簡単に流され、家はあんなにも簡単に津波に流され、町はあんなにも簡単に不毛地帯になるものかと、どこか正直他人事のようなようでした。しかし、今回の経験を通してその距離が縮まり、自分の出来ることが増えてきました。そして震災から5年が経過して、町はこんなにも再生するのに時間がかかってしまうのかと思いました。全国からたくさんの方が集まり協力しても、まだ仮設住宅に住んでいる人がいる現実を歯がゆく感じました。この環境で前を向いていくのはとても難しいと思うし、前まで持っていたものが100%戻るわけでは決してないが、それでも前を向いて欲しいです。全国の人が東北のことを心配しているし、気にかけています。実際に行動を起こしている人もいますので諦めないで欲しいです。私たちに出来ることは少ないが、行動に移します。



3年A組 Y. N. (越谷市立東中学校出身)

私は正直、今回のボランティアに最初はあまり乗り気ではありませんでした。親戚が福島で被災していることもあり、何も知らないし、もう5年もの月日がたっているのに今更訪れて悪い記憶を思い出させることは、とても失礼なのではないかと思ったからです。しかし今は今回のボランティア活動に参加して本当に良かったと思っています。地元の方々は皆さん本当に思いやりがあって、優しく、そして何よりも強い方々だと思いました。私たちに被災地の現状を詳しく伝えてくださった阿部さんやリチャードさん。のりを使って地域発展に貢献する親方。旅館のご夫婦、若旦那、お子さん方。わかめ工場の明るいおばあちゃんたち。一人ひとり



が今の石巻、東松島の為に努力している姿がとても輝いてみえました。この4日間、たくさんの人にお話を聞いたり、こちらから質問させていただく機会があり、その中で最も印象に残ったのが、皆さんの地震に対する知識の多さでした。わかめ工場でお手伝いをさせていただいている間、地震について話したのですが、60歳を超えるおばあちゃんたちが、私たちに地震のいろいろなタイプや次に起こりそうな場所、その時どうすべきかという対処法など、様々なことを教えてくださいました。もう二度と

同じことは繰り返さないという強い意志があり、尊敬すると同時に、絶対にこのことを忘れないと決めました。また私たちのことを「孫ができたみたい」と言ってくださったり、私のことを「ゆみちゃん、ゆみちゃん」と呼んでたくさんのおやつをくださったりと、たった一日なのに本当によくしていただいて、うれしい気持ちと同時に本当に皆さんの役にたっているのかと不安な気持ちにもなりました。しかし皆さんが共通して言ってくださった「来てくれてありがとう」「みんなを見ていると明るい気持ちになれる」「受験がんばって」という言葉に逆に救われてしまいました。今回のボランティアを通して最も強く思ったことは「絶対にもう一度ここに来たい」ということでした。石巻、東松島で学んだことを、もし私たちが被災したら絶対に生かしていきたいし、何よりも今回お世話になった沢山の方たちに恩返しをしたいと思います。復興はとても時間がかかることです。なので少しでも力になれるよう、観光やボランティアに行ったり、石巻、東松島だけでなく被災地の食べ物を進んで買いたいです。

